

## 授業科目の概要

(保健医療学部 理学療法学科)

科目区分	授業科目名	講義等の内容	備考	
教養科目群	科学的思考	基礎ゼミナール	本演習は、新入生が大学生としての役割を身につけることができるように、学生を支援することを目的としている。具体的には、学生を少人数のグループに分けて担当教員に配属し、(1)大学での学習に必要で、かつ高等学校までの教育において取得すべき内容の教育、(2)レポート・論文の書き方や文献の探し方、(3)大学生に求められる一般常識や態度、(4)専門教育への橋渡しとなるような基礎的知識・技能の教育などについて、ディスカッションを交えて演習を行う。(5)実践現場を早期に体験するため病院見学を行う。	複数教員による 共同担当
		学習方法論	学習方法論は、高等教育機関で学習するための導入教育としての位置づけで教授する。大学生として能動的に学習できるように基本的な学習方法の修得だけでなく、自主的な問題解決能力の基礎を養う。特に「聴く、読む、調べる、整理する、まとめる、書く、表現する、伝える、考える」といった能力を修得するために、講義ノートの取り方・教科書の読み方・文章作成の方法・要約の方法・図書館における情報収集・インターネットによる情報収集・情報の整理・レポートや論文の作成・プレゼンテーションの方法などの技法について学習する。	
		情報処理	この授業では、コンピュータの初心者がコンピュータを利用するうえで必要となる基礎知識およびコンピュータの基本操作の習得を目標とする。コンピュータの基礎すなわちハードウェアに関する基礎知識とソフトウェアを利用するための基礎知識を学ぶと共に、オペレーティングシステムや日本語ワープロソフト・表計算ソフトなどのアプリケーションソフトの操作を行う。具体的には(1)テンプレート使用による各種文書の作成や図表を用いたビジュアルな文書の作成(2)初歩的データベース構築(3)プレゼンテーション用のスライドや発表資料の作成(4	
		生物学	ヒトは生物であり他の生物に囲まれ依存しながら生きている。生物の生命現象や、普遍性を理解することが生物学の目的である。具体的には、(1)受精・発生・成長による形態の変化と生命の持続、(2)物質代謝における生命の持続、(3)エネルギー代謝による生命の持続、(4)生体機能の停止と形態の崩壊など、細胞について理解する。また、生殖によって自己の属する種と同じ種の個体を繁殖させ、種の形質を保存して系統を維持する遺伝の仕組みについて理解する。	

科目区分	授業科目名	講義等の内容	備考
教養科目群	物理学概論	物理学概論では、物理学の重要な法則と概念を典型的な物理現象の例を通じて具体的に理解し、いろいろな法則や概念を諸法則の相互関連を認識しつつ系統的に把握することを目的とする。具体的には、自然現象を定量的に理解するために必要な数学的事項、物体の運動を理解する力学、波の性質、熱力学とエントロピー、電場、電流と磁界、電磁誘導と電磁波、光の性質、相対性理論、原子と原子核などについて、基本的な知識を学習する。	
	生化学	生化学では、①「生命の維持と仕事」細胞・エネルギー・熱・pHなどの基本的な事について ②「栄養素」（糖質・脂質・タンパク質・ビタミン・電解質・水・核酸）についてとそれらの代謝 ③「酵素による代謝」体内の代謝のほとんどは酵素反応である ④「血液による恒常性」 栄養素の運搬・ホルモンの運搬・血液ガス老廃物の運搬・熱の運搬・pHと浸透圧について ⑤「血液と免疫」血液の組成と働きのメカニズム ⑥「臓器の生化学」肝臓・膵臓・胃・小腸・腎臓・神経・筋肉などの代謝の特異性についてを学ぶことで、栄養素が細胞・臓器を構成	
	食品栄養学	食品栄養学では栄養素の働きに関する知識を得、それら栄養素を含む食品と働きについて学ばせ、(①栄養素の体内での働き ②エネルギー供給栄養素とそれらを含む食品 ③身体を造る栄養素とそれらを含む食品 ④代謝調節栄養素とそれらを含む食品 ⑤機能性非栄養成分) これら栄養素を身体に取り込む「消化と吸収」について学ばせ、さらに、ライフサイクル（正常一健康時に加えて妊娠時期、成長期、高齢期など）や運動選手（アスリート）や特殊な状態での食事と食生活について講義する。また、「食生活と疾病」を生活習慣病（高血圧・肥満・糖尿病・	
	統計学	本講では代表値や相関と回帰を学ぶことで医学データのまとめ方や確率の基礎・分散分析などを理解する。データと標本調査について学習し、統計学的推定と検定、割合・率・比・リスクについて学んだあと、リスク比、オッズ比、オッズ差の信頼区間へと学習を進める。相関関係と因果関係について学んだあと検定・推定と標本数の関係を理解することで、研究の妥当性、コントロールの必要性、治療の効果、疫学研究から因果関係を調べるための考え方を身につける。	

科目 区分	授業科目名	講 義 等 の 内 容	備考	
教養科目群	人間理解と社会	生命倫理学	<p>(概要)  生命倫理学は「生命とは何か」というきわめて根元的な問いを対象とする学問であり、ヒトのみならず生物全体を含むものである。  現代社会や医療分野で問題となっている事例を取り上げ、生命の倫理について考察し、個々の学生が自らの生命観を育むことができるように教授する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p>	オムニバス方式
	人間理解と社会	哲学	<p>(概要)  はじめに哲学の基礎として、「世界、人間、神」について哲学的に考えることを学ぶ。著名な哲学者らが、それらについてどのように考えてきたかを考察し、それらへの理解を哲学的に深めるとともに、彼らにある根本や全体から考えるといった哲学的思考方法の基礎を学び、次ぎに東洋哲学と西洋哲学の特色へと進む。</p> <p>(オムニバス形式／全15回)</p>	オムニバス方式

科目区分	授業科目名	講義等の内容	備考	
教養科目群	人間理解と社会	心理学	心理学を学ぶことで心の仕組みと働き、さらには人間理解を深め、多方面で激動する現代社会の中で、先見性と方向性をもった活動をするための礎の確立を目指す。心理学の基礎的な理論や概念を学習し、さらにそれを実証するための研究法も学ぶ。さらに認知心理学分野、学習心理学分野やカウンセリング、ストレス、犯罪心理、家族心理、社会心理などについても具体的に学習する。	
		東洋思想論	現代社会を主導している思想は、民主主義や人権をはじめ、その大半が西欧近代の所産にほかならない。しかし同時に、その限界も明らかになりつつある。このような背景において東洋思想を学ぶ意味は、ただ単に過去をふり返ることにあるのでもなければ、西欧近代をやみくもに否定することにあるのでもない。人類の未来を展望する新たな思想を、東洋という領域のなかに発見し、再生利用することにある。本講義ではインドと中国を中心に、東洋の伝統思想を探求し、現代社会の諸問題に対し、何を提起できるか考察していく。	

科目 区分	授業科目名	講 義 等 の 内 容	備考
教養科目群	人間理解と社会	(概要) 医療と宗教の関係は、古来は融合したものであったが、近代科学の確立以降、医学は実証されないものを排除してきた。しかし今、健康は単に疾病の存在しないことだけでなく、霊性(spiritual)の健全性もうたわれ、宗教は医療において無視しえないものとなっている。人間の本質を探るアプローチの一つとして、宗教の輪郭を学ぶ。 (オムニバス方式/全15回)	オムニバス方式

科目区分	授業科目名	講義等の内容	備考
教養科目群	東洋史学	東洋史学では、中国の歴史を中心に日本周辺地域全般の歴史を概説する。特に医学を学ぶ者にとって中国医学史の概要を知ることには不可欠であろう。そこで、有史以来の医術、薬物処方から黄帝内経医学の成立と展開を経て現代中国の中西結合の医療に至るまでの歴史を学び、あわせて、中国医療の影響を深く受けたわが国の医療文化の歴史を学ぶことによって、広い視野を涵養することにつとめる。さらに日本周辺諸国との国際関係の理解にも役立つ。	
	社会学	社会学を学ぶ目的は、変化してゆく社会の動向を的確に把握し、社会全体をより良き方向へと導く方法を学ぶことにある。この観点に立って、現代日本社会が抱える様々な問題を考察し、社会全体の問題に常に対応できる力を涵養する。具体的には、心身不調・うつ・自殺・人格障害等を社会学の立場から考察する。さらに近年問題となっている児童青年期に起こる学習障害や注意欠陥多動性障害を取り上げ、その原因や問題点を考察する。このような現象は社会構造によって影響される場合が多く、これらの問題点を明らかにし、かつ自らの問題として考える力を養	
	法学概論	社会と法と法学について一般的な知識を学び、法とは何か、社会と規範また規範と法則について学ぶことで社会規範としての法の本質を学習する。また法と裁判として民事裁判や刑事裁判などの裁判制度、裁判の関係者について学ぶとともに裁判の基準としての制定法・慣習法・判例法、または条理といった法源についても学ぶ。次いで日本国憲法の人権と統治機構の2分野のうち主眼を人権に置き講義をおこなう。具体的には、憲法とは何か、人権、憲法による人権保障の意義、人権主体、表現の自由、人身の自由、財産権、社会権を内容とする。	
	社会福祉学	社会福祉の発達を社会環境の歴史的変化との関連で捉え、社会福祉諸法の概要をその成立根拠をふまえながら理解する。また、わが国の社会福祉の特徴や問題点、福祉サービスの現状を学習すると同時にその活用法について実生活との関わりの中で理解する。さらに、少子高齢化の進展をはじめ社会福祉を取り巻く環境が近年大きく変化するなかで、今後の社会変動と社会福祉制度・活動の動向について考える。福祉の動向・課題について関心をもち、自らの考えを持ち行動する態度を養うため、新聞記事等から事例を示し考察する。	

科目区分	授業科目名	講義等の内容	備考
教養科目群  健康科学と語学	英語Ⅰ（初級）	英語Ⅰでは、単語・熟語・慣用句の知識を含む語彙力や、文意を正確につかむ文法力を養い、日常生活で目にするようなレベルの英文を読んで理解する力の習得を目的とする。また、未知語の推測や背景知識、文化的背景の違いに関する知識などを活用して、文章の概要や要点を速く正確に読み取る技術や読解力を養う。文章中のキーワードを頼りにして速読を行い、書き手の意図を速く正確に捉える読解力を養う。	
	英語Ⅱ（中級）	英語Ⅱでは、英語Ⅰで獲得した英文読解の知識や技術をさらに発展させることを目的とする。さまざまな分野の英文を多量に読むことにより、中級から上級のレベルの英文を速く読んで正確に理解できる力を養う。パラグラフの構成や展開に注意して要点を把握するなど、英文読解に必要な技術にも触れながら、速読・多読の演習を行い、重要な情報を正確につかむ読解力を養う。速読によって得た情報をもとに議論をし、英語Ⅲで行う文章作成能力の基礎を養う。	
	英語Ⅲ（応用）	英語Ⅲでは、情報発信の道具として英語を活用するために必要な、基礎的な文章作成能力を身に付けることを目的とする。基本的な語彙や文法、文型、表現等を再確認しながら、それらを用いて文字で自己表現する方法を学ぶとともに、情報や意見を明確に伝えるため、論理的な文章作成の基礎を培う。また、単に考えをまとめたり、語彙を拡充したりするために、「聞く」「話す」「読む」活動を取り入れ、総合的な英語表現能力を養う演習を行う。	
	医学英語	医療従事者に必要な英語のコミュニケーション能力を身につけるため(1)コミュニケーションの構成要素について学習させ、(2)臨床現場で患者の主訴等の発話を正確に理解したり、また誤解を招かぬよう患者に指示を伝えたりするために必要となる的確な表現や語彙の選択能力を日本語・英語の相違点を踏まえて修得させる。また、(3)コミュニケーションの重要な構成要素である非言語化情報を汲み取り他者による発話の文脈を把握し的確にその意図を掴み、その上で英語によりの確に自分の考えを表現できるようにするための講義を行う。	

科目区分	授業科目名	講義等の内容	備考
教養科目群	英会話Ⅰ（初級）	英会話Ⅰでは、日常生活で用いられる定型的・慣用的な表現について学習し、その表現を自由に使えるように基礎的なコミュニケーション能力の養成を目的とする。日常生活で自然な速度で話される英語を聞き取りその内容を理解する力を養うだけでなく、日常の話題について基本的な英語表現を用いて自由に表現できる能力の獲得を目指す。対話における受け答えだけでなく、自らも問いかけができるような、会話を発展させる能力をも養い、十分な自己表現ができることを目指す。	
	英会話Ⅱ（中級）	英会話Ⅱでは、英会話Ⅰで獲得した技能を向上させ、さまざまな場面における幅広い話題について、対話から自分の意見を明確に発表できる力への発展を目指す。自然な速さの英語を聞き取りその内容を理解し、日本とは異なる文化的背景を把握して、英語を用いて、ある程度まとまった内容の自己表現ができる能力の習得を目的とする。発話の意図を十分に伝え、発展的に会話を続ける技法などを学び、日本や外国の文化・習慣などについても相互に情報や意見の交換ができることを目指す。	
	健康スポーツ科学	本講義では、運動負荷時にはじめて出現する生理現象の固有の変化、長期トレーニングによる器官、組織の構造的変化やそれに伴う運動生理機能の向上、不活動（運動不足）による生理機能低下など、生体の運動適応の過程について、運動生理学、スポーツ科学の観点から解説する。これにより、第1次予防の視点に立って運動が健康づくり、特に生活習慣病予防に役立つ根拠を示す。また、実際の医療やスポーツ科学の現場において広く活用されている「心肺運動負荷試験の基礎理論とその評価法」を学ぶことで、運動の制限因子や呼吸・循環器疾患における運動不	
	体力トレーニング科学演習	スポーツ（運動）を実施する目的は、健康増進、筋力・持久力向上、ダイエット等、実施する個人によって多種、多様である。本演習では、それぞれの目的に応じた効果的トレーニング方法の原理・原則を解り易く解説しながら、スポーツフィットネス・トレーニングを中心に実践で役立つ授業を展開していく。具体的には、バーベルやダンベルなどのフリーウェイト及びマシン機器を用いた筋力トレーニング種目、エアロビクスダンスなどの有酸素運動トレーニング種目、バスケットボール、サッカー等の球技スポーツや卓球、バドミントン等の軽スポーツを含んだ	複数教員による共同担当



科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考
教養科目群	健康科学と語学	スポーツ実習	本スポーツ実習では、学生が自らの適性に応じてスポーツ種目を選択できるよう、軽スポーツ、球技スポーツ、ニュースポーツ、ダンスなど多種多様なスポーツ種目を用意し、各種目特性を生かして、「思いっきり体を動かす爽快感」と「プレーを通じて感じる理屈抜きの楽しさ」を存分に経験できるようなゲーム主体の授業プログラムを提供する。その中で、体力のレベルアップや身体動作の向上を図ると同時に、ゲームを自主的に運営する能力を養う。また、スポーツの実践を通じて、学生同士の心の交流や人間関係を育み、生涯にわたり楽しく、計画的にスポー	複数教員による共同担当
		公衆衛生学	個人水準で健康を扱う臨床医学に対して、衛生・公衆衛生学は社会水準で健康を取り扱うので社会医学とも呼ばれる。その範囲は多岐にわたり、健康に影響をおよぼす様々なリスクを同定し、予防活動に結びつける学問である。本講義では「社会に役立つ公衆衛生」を基本として、衛生・公衆衛生学の理論、環境と健康、老人保健、感染症の予防と対策、生活習慣病や難病疾患、免疫、精神衛生、産業衛生、消毒、衛生統計などについて学習する。	
		チーム医療論	医療を行う際には、患者に対する心身両面への適切かつ最善の対応が求められる。この目的に向かって専門領域を異にする種々の職種の人々が関与している。チーム医療論では、これらの人々がチームとして包括医療を行うにあたって、それぞれの役割と機能、責務について理解し、相互の連携の在り方について考えることを目的とする。また、今日のチーム医療のあり方だけでなく、国際的な活動の拡大についても取り上げる。	
学部共通科目群	保健医療	保健医療研究法	(概要) 保健医療研究法では、研究の意義と方法、EBM (Evidence Based Medicine) の概念などを学ぶ。具体的には①文献検索の実際②論文の種類③論文の基本的構成④研究デザイン⑤データ分析⑥論文のまとめ方および学会発表の具体的方法などを学ぶと共に研究に関する倫理委員会の意義を学ぶ。また、様々な保健医療に関する研究を紹介し、卒業研究に役立てる。  (オムニバス方式/全15回)	オムニバス方式

科目区分	授業科目名	講義等の内容	備考	
学部共通科目群	保健医療	リスクマネジメント論	頻発する医療事故の報道により国民の医療に対する不信感や不安は強くなる一方である。医療従事者は「ヒトは間違えるものである」ということを十分に理解したうえで質の高い安全な医療サービスを提供する必要性を理解することが必須である。そこで感染や転倒など事故事例の分析を通してその背景にある原因を理解するとともに事故の再発防止と未然防止に取り組む方法を学習する。あわせて、医療施設で発生するアクシデント事例やインシデント事例を分析し医療現場におけるリスクマネジメントの重要性を学習する。	
	保健医療	統合医療学	現代医学と伝統医学の両者を包含しながら患者を包括的にケアすることを目指す統合医療の概念を理解させる。まず、統合医療の定義、従来の医療や補完代替医療との違い、統合医療の普及状況、現代における統合医療の必要性について解説する。次に各論として、統合医療を構成する個々の主要な補完代替療法について概説し、それを実際に臨床応用している医療機関の実践手法を紹介する。さらに、現代医科学やEBM（根拠にもとづく医療）の観点からみた問題点も指摘し、現代の医療が統合医療として今後向かうべき方向性について示唆を与える。	
	保健医療	伝統医学概論	伝統医学概論では、漢方医学の知識を学習する。漢方は中国から伝来して以来約2000年をかけて我が国独自の伝統医学として完成した。本講義の主な内容は漢方医学の歴史、漢方医学の病理学、処方学、診断学である。また、消化器疾患、呼吸器疾患、婦人科疾患、整形外科疾患、高齢者の疾患、ストレス・生活習慣病などを取り上げ、それぞれの代表的な疾患に対する診察、診断、処方、適応と限界、現代薬学との違いなどについて学習する。	
	保健医療	公益法人のマーケティング	医療法人や学校法人また社会福祉法人など、多くの公益法人は通常の企業などと違い、非営利法人として公益性とその役割の重要性を大きく担っている。また、公益法人は、会計基準においても企業会計とは異なり、マーケティングや経営手法など企業を代表とする営利法人と異なるアプローチを要請されている。本講義では、公益法人（特に医療法人、学校法人）の経営に不可欠な意思決定や問題解決のために必要とされるガバナンスの仕組みや経営科学的なシステム分析の理論と方法論および法制度に関する基本的な知識を習得することを目的とする。	

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考
学部 共通科目群	保健医療	医療コミュニケーション論	医療コミュニケーション論では、患者・家族・医療従事者で構成される医療現場での総合的な諸問題や、組織としての病院における経営や管理などに関する多様な問題を論ずるための基本的な事項を学習する。医療の基礎となる人間・社会理解と医療倫理、リスクマネジメントに対する基本的な心構えおよびコミュニケーションの重要性、全人的医療や良好な医師患者関係の確立の重要性、医療従事者としての自己実現などについて学習する。	
		人体の構造Ⅰ (運動器系)	人体の構造Ⅰでは、人体の基礎を構成し運動器系の中心的な器官である骨と筋について学習する。骨については、分類・構造・発生などの総論と、それぞれの骨の部位や形態的特徴などを学習する。また、筋については分類・構造などの総論に加えて、それぞれの筋の起始、停止、支配神経、作用などを学習する。これらの理解を通じて、骨と筋が運動系として機能するときどのような連携をなしているか考えるとともに、運動時に重要な役割を果たしている関節や靭帯の形態と機能についても理解を深める。	
学科 専門科目群	専門基礎科目	人体の構造と機能 及び心身の発達	人体の構造Ⅱでは、人体の構造Ⅰに続いて、血液、骨髄、脈管系、リンパ系、消化器系、呼吸器系、泌尿生殖器系、内分泌系などについて学習する。さらに、組織学的構造を学習することにより、微細構造と肉眼的形態との関連について理解を深めることを目的とする。特に、身体の重要な調節機構である内分泌系と人体の構造Ⅲで学習する自律神経系の関連を学習し神経系統が直接に、各臓器を制御する仕組みについても考えることができるように学習する。	
		人体の構造Ⅱ (循環・内臓系)	人体の構造Ⅲでは、感覚器系、末梢神経系、中枢神経系について学習する。感覚器系では、外界の情報を受容する器官の構造と機能について学習する。末梢神経系では、感覚器により得られた外界の情報を中枢神経系に送り、中枢神経系の命令を末梢効果器に伝える末梢神経について学習する。中枢神経系では、脊髄や脳の構造について、末梢神経やそれにつながる器官との関連を考慮しながら、知識や理解を深める。	
		人体の構造Ⅲ (神経・感覚器系)		

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門基礎科目	人体の構造と機能 及び心身の発達	人体の構造実習	人体の構造実習では、人体の構造Ⅰ・Ⅱ・Ⅲで学んだ知識をもとにして、骨・筋、脳・脊髄について人体模型を用いて実習を行い、局所から全体にかけて生体の構造と機能の関連について理解を深める。また、人体模型を用いた肉眼解剖だけでなく、光学顕微鏡を用いた組織学実習も行い、各臓器の肉眼的構造がどのような微細構造によって表現されているかについて理解する。	
			人体の機能Ⅰ (動物性機能)	人体の機能Ⅰでは、人体生理機能の基本的概念、個々の現象、分子論的機序などを学び、さらに医学の他の分野を学ぶための基礎知識を修得することを目的とする。生理学の意義、細胞の一般生理学の講義に続き、人体生理学の動物性機能(神経と筋、中枢・末梢神経系、感覚、運動、自律機能と本能行動、高次脳機能)を学習し、医学の他の分野を学ぶための基礎知識を修得することを目的とする。	
			人体の機能Ⅱ (植物性機能)	人体の機能Ⅱでは、主として生命維持に必要な各臓器の機能がどのように統合的に調節されているかを学習する。消化、呼吸、排泄、循環、体温などの植物性機能を系統的に学習し、その多くが生体に外乱が加わっても生体の内部状態を一定に保つフィードバック機構と外乱に対して予測的に内部状態を制御する予測制御機構であることを学習する。また、生命維持機能の解明がホメオスタシス維持機構の解明に他ならないことを理解する。	
			人体の機能実習	人体の機能実習では、生理現象の観察を通じて、得られたデータの処理・解析から生体機能の総合的理解、体系的知識の獲得を目的とする。「呼吸と循環の計測」、「脳波」、「感覚-運動系の統合」、「心電図」、「ヒトの誘発筋電図」などの実習を通じて、講義で修得した知識を、実験を通じて更に具体的、体験的に理解し、臨床医学においてどのようにその知識が用いられているかを理解する。	

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門基礎科目	人体の構造と機能 及び心身の発達	基礎運動学	身体運動の評価・治療技術に必要な運動学に対して、骨学、筋学、関節学、神経学など運動器と感覚器の構造と機能、力学、運動の法則、運動の中枢制御、栄養とエネルギー代謝などの基礎を踏まえ、骨の構造と運動、関節構造と運動、筋の力学的特性、神経機構と運動・姿勢制御など、四肢・体幹における運動、動作、姿勢の分析、運動の発達、運動学習など身体運動の理解と治療技術に対する基礎知識を学習する。そして、運動、動作、姿勢を観察・分析した結果に対し、専門用語を用いて表現できることを目的とする。	
			臨床運動学	骨関節障害、神経筋障害、中枢神経障害、呼吸循環障害などにより引き起こされる運動機能障害を理解するため、それらの障害の成り立ちを解剖学、生理学、病理学、基礎運動学、心理学、栄養学の観点から整理し、その運動機能を分析し理解することを目的とする。また、代表的な運動機能障害に対し、基本的な理学療法と関連付け、検査・測定・評価法、理学療法計画、理学療法手技、理学療法効果について基本的な考え方が確立できるよう進めていく。	
			人間発達学	医療者や保護者を含めて我々大人は、子ども達が病気でないだけでなく、健やかに育ち社会の一員となってくれることを願っている。子ども達は、生物学的にヒトとしての一定の「発達の過程」を経る一方で、身体もこころも自然・社会・文化から様々な影響を受けて、時には大きなダメージを受けることもあるし、生まれた時にすでに病気や障害をもっていることもあり、一人一人個別で尊重すべき「発達の歴史」を有する。 『人間発達』では、新生児からの成長発達過程及び子どもをとりまく環境や保健について学びながら、人がいかにしてヒトから人間へと変	
	疾病と障害の成り立ち 及び回復過程の促進	リハビリテーション概論	この科目の特徴は、リハビリテーションの全体像を理解させ、自己の進むべき方向性の指標となるよう指導することである。その主な内容は、リハビリテーションの概念、理念、歴史、リハビリテーションの対象となる障害の国際障害分類および国際生活機能分類、種別と人数、原因疾患、評価、リハビリテーションチーム構成と関連職種、リハビリテーションの制度的分類とその特徴（病院リハ、高齢者入所施設リハ、通所リハ、訪問リハ）等について理解させる。		

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門基礎科目	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	疾病の病因と病態総論	疾病の病因と病態総論は疾病に関する基本的概念を扱うことから、医療に従事する者にとっては欠くことの出来ない学問である。従って疾病の病因と病態ではまず病理学の意義ならびに病態を捉えるための病理学的手法について学習する。次いで人の疾病を理解するための基礎となる発生機序、経過、予後などの疾病の成り立ちについて学習する。さらに様々な臓器や組織に共通してみられる病変である退行性病変、循環障害、進行性病変、炎症、免疫異常、腫瘍、先天性異常などについて、総括的に学習する。	
			総合評価学	総合評価学は、運動器系を中心とした臨床に必要な病態把握の判断としての理学的検査を中心に、身体計測法・関節可動域計測法・徒手筋力検査法・反射検査法・知覚検査法等について各種検査法の意義・目的・方法・陽性所見・注意事項等の基本的な身体所見の取り方とその臨床的意義を教授する。また、観察（診察）事項を記録することの重要性から、医療面接、カルテ記載法についても教授する。	
			内科学Ⅰ （総論・循環・呼吸・代謝）	総論では、診断と治療に対する心構えを教授し、各種検査の臨床的意義と検査結果の理解の仕方・合理的な治療方法を学習する。さらに、分子生物学・遺伝子工学が飛躍的に進歩し、再生医療・分子治療が臨床応用されている。このような現況も踏まえ、最新の医療に対する基礎的知識も修得する。 次に循環器、呼吸器、代謝などの代表的な疾患を取り上げる。各疾患について、成因と病態生理について理解し定義、症状、検査法、診断・鑑別診断、経過と予後、治療方法について学習する。	
			内科学Ⅱ （消化・泌尿・免疫・小児科）	（概要） 内科学Ⅰで学習した総論の内容を踏まえ、消化器、泌尿器、免疫系、感染症などの代表的な疾患を取り上げる。各疾患について、成因と病態生理について理解し定義、症状、検査法、診断・鑑別診断、経過と予後、治療方法について学習する。また、内科学Ⅰで学習した分野の疾患も含め、各種内科疾患についての知識を整理すると共に症候から鑑別診断・確定診断へと至る思考のプロセスについて学習する。また、各疾患についての小児の特異性についても学習する。  （オムニバス方式／全15回）	オムニバス方式

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門基礎科目	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	神経内科学	神経内科では、脳・脊髄・末梢神経・筋肉の障害によって起こるさまざまな疾患について学習する。高次脳機能、脳神経系、運動系、感覚系、自律神経系など人体の構造や人体の機能で学習した知識を基盤として、脳神経・筋疾患の病態、診断、検査、治療について総論・各論を学習する。また、脳血管障害、神経変性疾患等の代表的な疾患について、実際の症例に基づいて学習し、鍼灸や理学療法における注意点について理解を深める。	
			救急処置法	(概要) 救急処置法とは、突発的な傷害・疾病に対して、できる限り早く、正しい処置をすることである。的確な判断力と正確な処置技術が必要とされ、実際の緊急場面では、まず重症度の判断や症状の経過判断などの的確な判断を下し、続いて蘇生法、包帯法、止血法、体位保持法、固定法、運搬法などの処置を正確に選択・適用しなければならない。また、外科的知識も重要である。本講義では、実際の緊急場面を、事例をあげて説明し、各場面における的確な判断方法や正確な処置技術、必要な外科知識について学習する。  (オムニバス方式／全15回)	オムニバス方式
			脳神経外科学	脳神経外科学では、人体の構造や人体の機能で学習した神経の構造や機能に関する知識に基づいて、その異常によってもたらされる病変の外科的治療法について学習することを目的とする。脳・脊髄および末梢神経に関する解剖・生理の知識を再確認し、神経学的診察法を身につけ、部位診断及び高位診断に関する知識を習得する。また各疾患についての画像診断（CT、MRI、血管撮影、など）や補助診断（脳波、誘発電位など）の読影についても、事例に基づいて理解する。	
			整形外科	整形外科では、運動器運動器の疾患について学習し、運動器の基礎、診断、治療、外傷、感染症、腫瘍、関節リウマチと類縁疾患、変性疾患、炎症性疾患、先天性疾患などについて学習する。また、上肢、下肢、脊柱に分かれた運動器別の疾患について学習し、日々の臨床で遭遇する様々な疾患の理解と臨機応変に対応できる知識を得ることが目的である。さらに、スポーツに関連した事項についても学習し、スポーツに関連した治療にも対応できるようにする。	

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門基礎科目	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	精神医学	精神医学では、精神症状の把握・評価、検査、薬物療法を中心とした身体的治療、精神療法（心理社会的治療）、精神障害の成因論と、身体により基礎付けられた精神障害から心理的側面の強い精神障害に至るまでの疾患について理解を深めることを目標とする。そのため、頻度の高い精神障害の診断と対応、身体疾患と精神障害との関係を習得する。また、児童期から老年期までのライフステージ各段階における精神障害についても学習する。	
			臨床心理学	臨床心理学では、個人が抱えている心の問題、行動上の食い違い、人間関係の問題などを心理学的な知識と技術を用いて、適応的な方向にもっていくための心理学の方法や理論について習得する。心理学的な問題にはどのようなものがあるか、心理アセスメント、臨床心理の理論と技法、心理的援助の技法などを中心に取り扱い、事例を通して臨床家として望ましい治療援助のあり方を患者の立場から理解していく態度を習得する。	
			リハビリテーション医学	リハビリテーション医学は高次脳機能障害を伴う疾患、もしくは肢体不自由を主症状とする疾患を対象とする医学の一分野であり、医学的リハビリテーションと同一のものではない。授業においてはまず両者の違いを十分理解させ、その上に立ってリハビリテーション医学の歴史、医師の立場から見たリハビリテーションの概念、診断法、治療法、他の医学分野（ことに整形外科学、脳神経外科学、神経内科学など）との関連性について講義し、理解させる。	
			老年医学	老年医学では、加齢に伴う様々な生理学的変化を加味した疾患について学習する。社会の高齢化に伴い老年病医学は医学の分野のみならず社会的にも重要な位置を占めており学習目標とすべき知識量は膨大であるが、老化の機序、老年者における生理学的変化、さらにそれらを踏まえた老年症候群・老年病治療学を学習し、老年病診察に必要な技術を概念的に取得することを目標とする。さらに老年者の介護・福祉の実際から最新の分子生物学による先端医療まで幅広く多面的に講義する。	
			作業療法概論	リハビリテーション医療の一分野を担う作業療法とその業務を担当する作業療法について学習し、その全体像を理解する。その主な内容は作業療法と作業療法士の定義、概念、作業療法の手段、作業療法の実施場所、急性期リハ、回復期リハ、維持期リハにおける作業療法の役割と専門性、リハビリテーションチームの他の関連分野との連携等について学習する。	
			言語聴覚療法概論	リハビリテーション医療における言語聴覚療法は、言語の発達過程の障害によるものと、高齢者の脳血管障害を中心とした言語獲得後の障害によるものの2系統がある。しかし、言語獲得の手法は両者に共通するものである。講義においては小児期における言語・聴覚の発達とその障害、言語獲得後の言語喪失と再獲得の可能性、それらに対する言語獲得の手法、家族や周囲の人の関わり方の重要性、言語聴覚士の専門性などについて理解させるよう指導する。	



科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門基礎科目	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	介護学概論	介護（ケア）は、病気や障害、老いのために身体上又は精神上的の障害により日常生活を営むことに支障が出てきた者の生活の質を高め、自己実現を図るために援助することである。具体的には日常生活を営むことが困難な者に専門的な知識及び技術をもって、入浴、排泄、食事その他必要な世話をし、その人らしく生きることを支援する。介護学概論では、介護の意義と障害のある人や高齢者における介護の役割を理解し、介護に関する基礎的な知識と技術を習得する。特に介護に必要な福祉機器の理解と介護保険や自立支援法等の社会保障制度上の介護について深め	
			スポーツ医学	スポーツ医学では、スポーツ・運動に関連する医・科学的事項と、そのために必要な運動生理学的知見について学習する。健康維持のためのスポーツ、障害者スポーツやリハビリテーションに至るまで、幅広い視点から身体活動の医学的効果と意義について理解し、スポーツ外傷や障害の予防に関する知識を習得することを目的とする。学習を通じて、スポーツ、運動の実施、あるいは指導に役立つことをも目的とする。	
			芸術療法論・レクリエーション論	病院あるいは高齢者施設などにおいて行われているさまざまなレクリエーションは、それ自体に治療的意義があるものであり、患者や高齢者の生活を潤すものである。レクリエーションの原点は芸術療法に由来しており、それを学ぶことによって患者や高齢者との接し方や治療にも活かせることを理解する。授業内容は、芸術療法の主なもの（絵画、音楽、園芸など）の実技と体験を通じて、芸術療法とレクリエーションについて実感させ、理解を深める。	
	専門科目	基礎理学療法学	保健、医療、福祉の領域において大きな転換期とともにリハビリテーションが重要視されてきている。リハビリテーションを推進してきた社会思想の展開、現代社会の諸要求を反映した法律や制度まで、様々な諸事項をとりあげるとともに、障害を理解する。障害に対して、機能障害（impairment）、能力低下（disability）、社会的不利（handicap）の基本アプローチを基に医療行為の学問的支柱として考えていく。理学療法的手段、作業療法の実施場所、急性期リハ、回復期リハ、維持期リハにおける作業療法の役割と専門性、リ		

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考
学科専門科目群	専門科目	基礎理学療法学	<p>(概要) 運動器疾患の症例を疾患別にグループ化し症例の類似性と相違性を機能障害と動作障害の結びつきより抽出し適応する治療内容を検討・理解する目的で行う。また各種運動器疾患における障害に対する専門性のある応用的治療技術を学習する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p>	オムニバス方式
			<p>(概要) 神経系疾患の症例を疾患別にグループ化し症例の類似性と相違性を評価内容と治療内容の結びつきより抽出し適応する治療内容の妥当性を検討・理解する目的で行う。また各種中枢・末梢神経疾患における障害に対する専門性のある応用的治療技術について学習する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p>	オムニバス方式
			<p>(概要) 呼吸器疾患、代謝系疾患、循環器疾患の症例を疾患別にグループ化し、症例の類似性と相違性を治療内容と治療効果の関係より抽出する。さらに治療方法の妥当性を検討・理解する目的で運動負荷の基礎理論を学習する。また、呼気ガス分析装置、自転車エルゴメーターを用い、各種生体反応をモニタリングする技術とともに障害に対する応用技術についても学習する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p>	オムニバス方式
		運動器系理学療法セミナー		
		神経系理学療法セミナー		
		内科系理学療法セミナー		

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考
学科専門科目群	基礎理論	医療関係法規論	理学療法士に直接間接を問わず関連のある法律並びに行政について理解させる。その主な内容は、理学療法士作業療法士法、医療法（病院）、医師法ほか医療関係者関連法の概要、社会福祉関連法（特に身体障害者福祉法および老人福祉法）と行政、介護保険法と行政、老人保健法と行政等のほか、医療における理学療法関係の診療保険点数ならびに介護保険点数についても言及し、理学療法士の法的な位置づけについての知識を習得させる。	
		理学療法評価学総論	国際疾病分類(ICD)と国際障害分類(ICIDH)を基に疾病と障害の表裏一体性を理解し、評価における障害の階層性を学習する。また情報収集・問題点の抽出・治療計画立案にいたる理学療法プロセスの一貫性を把握し、障害評価に必要な検査測定項目・動作観察項目を抽出・選択できることを目標とする。そして疾病に至るまでの病歴とそれまでの身辺動作の機能、疾病と同時進行あるいは続発的な社会的不利などの情報収集についてもその因果関係を理解し現在の状態把握に活用することを学習する。	
	理学療法評価学	理学療法評価学各論	障害評価に必要な各検査項目の習得を目標とし、一般的事項として、問診・視診・触診を中心に学び、技術習得のために身体計測として周径や四肢長など身体の形態障害把握や左右差比較に必要な知識と技術、関節可動域測定・筋力測定などの各検査・反射・感覚などの神経系疾患の評価に必要な知識の理解と必要器具の使用法とその手技を学び、観察事項として起居・歩行などの基本的な動作能力障害の把握に必要な知識と技術を習得する。	
		運動器系評価学	整形外科疾患にみられる理学療法評価（機能障害と能力障害の把握、並びに治療の効果判定）を、最新の動作解析装置、筋力測定機器を使用しながら教授する。 また、各種運動器疾患に対して、治療プログラムの立案や、治療効果を判定するための基本的な評価方法を、理学療法評価学各論で学習した内容（関節可動域測定・徒手筋力測定等）を踏まえ教授する。	

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考
学科専門科目群	専門科目	理学療法評価学	<p>(概要)</p> <p>中枢神経系疾患には脳血管障害、脳外傷、パーキンソン病、失調症、神経難病などがあり、これらの疾患を理解するためには、正確な神経系の評価が必要である。そこで理学療法士に必要な神経学的評価法、神経学的徴候及び、中枢神経系の鑑別診断法などについて教授する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p>	オムニバス方式
		理学療法評価学	<p>(概要)</p> <p>運動や活動に影響する骨関節、筋神経系以外の生理維持機能を、呼吸・循環機能を中心に学習し、体温調整や消化器系などの諸内臓機能について学習する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p>	オムニバス方式
		理学療法治療学	<p>日常生活用具学</p> <p>人が日常生活を営む際に、機能の低下等によりそれが満足に行えない場合に、その機能を補助あるいは代償する用具が必要である。その主たるものは下肢機能である歩行を補助または代償する杖、松葉杖、歩行器、車椅子といった「移動補助具」と、主に上肢機能である食事、更衣、衛生などの諸動作を補助する自助具である。この移動補助具、自助具について、基礎編（意味、使用目的、構造、種類、材質等）と臨床編（選択基準、処方と適合判定、使用に必要な条件、基礎訓練、使用法等）に分けて指導する。</p>	

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門科目	理学療法治療学	<p>(概要)</p> <p>理学療法の治療手段の中で重要な運動療法について、基本を理解し知識を習得する。その主なものは、運動療法の理論とその基本的手技、その効果について説明する。さらに具体的な治療手技や注意事項も教授する。</p> <p>(オムニバス方式／全30回)</p>	オムニバス方式	
			基礎運動療法学	<p>医学的リハビリテーションにおける物理療法の位置づけは、リハビリテーション医学の発達と物理学の発展に劣らぬ変化を遂げ一部技術は先端的物理学の分野であることを理解し、物理学で履修した温熱・寒冷・音波・光線・水などの物理エネルギーが人体に及ぼす影響を踏まえ一般効果と特異的効果把握し、疾患による一般的な適応と禁忌を理解する。また、機器の使用に関する実技を習得するだけでなくリハビリテーション工学に基づく、生体材料や工学機器などの紹介も含め教授する。</p>	複数教員による 共同担当
			基礎物理療法学	<p>(概要)</p> <p>基礎日常生活活動学では、人間の日常生活の基本として遂行される食事、排泄、整容、更衣、移動などの代表的な動作を取り上げ、それらの動作遂行に必要な条件を解説するとともに、日常生活活動の概念、位置づけを教授する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p>	オムニバス方式
		基礎日常生活活動学			

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門科目	理学療法治療学	<p>(概要) 整形外科領域における運動器疾患の病態を理解し、保存療法並びに手術療法に関わる理学療法について理解する。</p> <p>(オムニバス方式／全30回)</p>	オムニバス方式	
			運動器系理学療法学	<p>(概要) 整形外科における各種運動器疾患に対する基本的な治療技術を、実技を交えながら教授する。また治療後の効果判定について、運動系評価学で学習した内容(各種測定機器の使用)を踏まえながら教授する。また、各種運動器疾患に対する基本的治療技術(関節可動域訓練、筋力増強訓練、ストレッチ、物理療法、動作訓練等)の概要を教授する。</p>	複数教員による共同担当
			運動器系理学療法学技術論	<p>(概要) 神経系理学療法学では、中枢神経系と末梢神経系に大別し教授する。中枢神経系では、機能回復のメカニズムや代償運動などを活用し、機能回復の促進や援助、温存機能の利用と代償動作などを学習する。末梢神経系では、遠心性(運動性)神経機能回復の促進や援助技術などを中枢神経系と対比し教授する。</p> <p>(オムニバス方式／全30回)</p>	オムニバス方式
			神経系理学療法学	<p>神経系理学療法学技術論では、中枢神経系と末梢神経系に大別し教授する。中枢神経系の技術論では、機能回復のメカニズムや代償運動と代償動作等を活用し、機能回復の促進や援助、温存機能の利用と代償動作を利用した治療技術を学習する。また各種訓練機器を応用した治療も学習する。末梢神経系の技術論では、特に遠心性(運動性)神経機能回復の促進や援助技術を中枢神経系の治療と対比し理解する。また、重症筋無力症や筋ジストロフィーなどの神経筋疾患の治療技術も学習する。末梢神経においては電気刺激装置による、神経筋の促通や筋萎縮予防の演</p>	複数教員による共同担当

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門科目	理学療法治療学	<p>(概要)</p> <p>内科系理学療法学では、循環器疾患、呼吸器疾患、脳血管障害、膠原病および糖尿病や高血圧などの生活習慣病患者の理学療法を学習する。</p> <p>(オムニバス方式／全30回)</p>	オムニバス方式	
			内科系理学療法学技術論	内科系理学療法学技術論では、①循環器疾患と呼吸器疾患、②脳血管障害および生活習慣病などに大別する。①の循環器疾患と呼吸器疾患では、主に循環器疾患、呼吸器疾患の理学療法プロセス、日常生活動作指導について理学療法のプロセス立案、理学療法の実施、リスク管理、再評価などの技術を学習する。②の脳血管障害および生活習慣病などでは、脳血管障害、膠原病および糖尿病や高血圧などの生活習慣病の理学療法プロセス、日常生活動作指導について理学療法のプロセス立案、理学療法の実施、リスク管理、再評価などの技術を学習する。	複数教員による共同担当
			発達障害理学療法学	小児リハビリテーションにおける乳幼児の発達を理解し、経年的な個性に応じた援助を効果的に行う為に正常発達からの歪みや逸脱を実際のスクリーニングで見わけることやより早期に障害を予防し、将来設計の援助を行えるために必要な知識を学習する。また特に小児においては固定した障害の医療要素が過去には強調されており、一部の治療的技術に偏らずに基本的な治療概念とその技術を学習する。また家族を含めた環境整備や社会資源の利用などについても学習する。	
			義肢装具学	工学的技術の医学への応用であり、義肢と装具を大別し義肢は大腿義足・下腿義足を中心に処方とそのチェックアウトを学習する。装具は上肢・下肢・体幹装具に区分し、固定・矯正など目的に応じて分類し学習する。また下肢装具は部位別に大腿・下腿のそれぞれを支柱付・プラスチックの典型的なタイプを学習する。また、プラスチック装具の材質の特徴や最近の工学技術の医学への応用についてのトピックスを紹介する。実習として陽性ギブス作成やプラスチック下腿装具の作成の過程を学習する。	

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門科目	理学療法治療学	テーピング技術論	テーピングは、関節の固定と運動の制限、組織の圧迫等に用いられ、応急処置や再発防止も含めた外傷の予防、運動の矯正を行えるため、アスレチックのみならずリハビリテーションの分野の臨床技術として利用価値が高い。基礎として、テーピング前の診断、材料・用具の使用法、テーピング後の確認、巻き替えや除去を学び、特に上・下肢の運動器傷害のテーピング法についても学習する。	
			摂食・嚥下障害学	摂食・嚥下はヒトが生命を維持するために最も必要な機能と行動である。特に摂食は心身ことに手指、咀嚼、言語の発達と極めて関連性が高い。嚥下は摂食機能と行動と連動して発達する。授業では摂食・嚥下に関与する解剖生理学的事項とその発達、小児期における摂食・嚥下障害の原因・症状、高齢者の摂食・嚥下障害の原因・症状などの評価と対策などについて具体例を提示しながら指導し、理解させる。	
			理学療法特論Ⅰ (脳・脊髄疾患)	理学療法特論Ⅰは診断と障害の関連性、疾病の予後と障害の予後を人体の構造と機能を軸に学習し、必要に応じて技術面を演習する。具体的には運動器疾患、中枢神経系疾患を扱う。運動器疾患では骨関節、筋、末梢神経組織障害、中枢神経系疾患では脳・脊髄の診断と障害の関連性、疾病の予後と障害の予後を学習する。治療として、物理療法を含め臨床での応用技術を指導する。	複数教員による共同担当
			理学療法特論Ⅱ (内科・循環器疾患)	理学療法特論Ⅱは診断と障害の関連性、疾病の予後と障害の予後を人体の構造と機能を軸に学習し、必要に応じて技術面を演習する。具体的には呼吸器疾患、循環器疾患を扱う。慢性呼吸器疾患では肺線維症、肺気腫など。急性呼吸器疾患では肺炎、気胸など。循環器疾患では内循環と外循環。更に糖尿病などの代謝性疾患の診断と障害の関連性、疾病の予後と障害の予後を学習する。	複数教員による共同担当



科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考
学科専門科目群	専門科目	ボランティア活動論	ボランティアは、自発性に裏付けられた主体的な活動であり、現代社会において介護保険をはじめ社会保障制度の整備が進んでいるが、制度の狭間にある問題点を少しでも埋めようとする相互扶助による活動である。講義では、医療・福祉・保健現場をはじめ、在宅で障害もある方や高齢者が自立して暮らせるための活動および障害児支援活動など様々なボランティア活動について考察させると共に、日本の医療・保健・福祉行政との連携について探る。特に全国30カ所以上の自助具製作ボランティアが活動している自助具製作ボランティアの活動から、自助具製作	
		地域理学療法学	地域リハビリテーションは、障害のある人や高齢障害者が住み慣れたところで、そこに住む人とともに一生安全に生活が送れるように医療や保健、福祉およびそれにかかわる人々がリハビリテーションの立場から行う活動である。講義では、地域リハビリテーションに基づく理学療法による具体的な支援方法やわが国の医療制度・介護保険等の社会保障制度の理解、さらにヘルスプロモーションなどを理解することにより地域ケア現場で望まれる理学療法士の理解を深める。特に介護保険制度の理解とそれに基づいた在宅生活を支援する上で必要な訪問理学療法の実践的	
		生活環境論	障害のある人や高齢障害者が、日常生活をする上で、個人の障害の因子だけでなく、周りの環境と相互に影響を及ぼす。講義では、国際生活分類－国際障害分類改訂版－（ICF）を理解しつつ、現状の障害が地域ケアにおいてどのような影響を及ぼしているのか、それを解消するためにどのようなことが必要で理学療法士として実践していくことを理解する。具体的には自助具をはじめ福祉機器の理解とともにその使用法や介助方法を理解する。また住宅改修などの住居改善からバリアフリーの街作りまでを理解する。特にベッド等の介助方法と移乗に関連する	
	卒業研究	卒業研究	3年から4年までの2年間に於いて指導教員と研究テーマを定め、指導教員の指示で、大学教育の集大成として、これまで修得してきた研究に対する心構え、態度、研究に対する基本的知識に基づいて、学習期間中に実験・研究・調査、あるいは文献講読、症例研究など様々な方法を用い、卒業研究をまとめさせる。	複数教員による 共同担当

科目区分		授業科目名	講義等の内容	備考	
学科専門科目群	専門科目	臨床実習	臨床見学実習	この実習は、教養分野と専門基礎分野が終了した時期の2年次に1週間（5日以上）行い、今後理学療法士を目指す実習生としての資質向上や現場における理学療法士の業務全般・他職種との役割分担やチーム活動を見学し、医療人としての医療倫理に基づく基本的マナーを実践することで、学生自身が将来を見通すための見学実習の位置付けとする。実際には医学的兆候を知る為の血圧測定や脈拍の計測などのバイタルチェックや問診などの実技も経験する事で今まで履修した分野の重要性を認識し今後の学習姿勢の向上にも働きかけることを目標としている。	複数教員による 共同担当
			臨床評価実習	この実習は、専門分野において理学療法評価学と運動療法・物理療法の基本的な手技の履修後3年次に3週間行われる評価実習の位置付けである。理学療法プロセスにおいては、情報収集と検査測定を行い治療計画まで行えることを目標とし、臨床において基本的な原理原則に沿って基本的技術の実践力を習得するための実習である。学生自身においては習得した知識と技術の真偽の確認的要素も有り今までの教授学習方法のフィードバック機能を期待できる実習である。具体的には、疾患に応じた障害評価を可能にする評価項目の選択と実施、抽出された問題点に対	複数教員による 共同担当
			臨床総合実習 I	これまで履修した専門科目を応用し、障害を評価し、立案した治療計画を実行し経過を観察する実習であり4年次前期に8週間行う。担当した症例を通し情報収集・検査測定と評価・問題点の抽出・治療計画立案と実施を実践し理学療法プロセスを経験するだけでなく、実習期間中の経過や変化、理学療法の効果を学習する治療実習である。実際には他職種や家族などとのコミュニケーションを含めより自律的に履修した内容を実践し、専門職としての認識やチームワーキングなどの組織の運営をカンファレンスなどで体験する実習である。担当症例において少なくとも	複数教員による 共同担当
			臨床総合実習 II	この実習は、臨床総合実習 I に続く臨床での実践力を向上させるための実習である。臨床総合実習 I で履修した一連の理学療法プロセスを学内でフィードバックし経験が不十分な項目を反復学習する目的で4年次後期に8週間実施する。実際には、臨床総合実習 I での未達項目の反復学習と未経験症例の担当を目標とする。一連の理学療法プロセスを実施し、理学療法士の社会的役割や責任についても専門職として習得し一貫した理学療法士の職務を深く理解する実習である。担当症例において少なくとも1例の症例報告を作成する。	複数教員による 共同担当